

学部から博士まで8年間(1年間留学していたので)通っていた駒場キャンパスに3年ぶりに出戻りました。学部のころからあちこちうろろしていたこともあり、久しぶりのキャンパスでは行き会う人々に「あれ、しばらく見なかったね」と温かく迎えていただきました。

所属先の「科学技術インタープリター養成部門」は、全学の大学院生を対象とした副専攻プログラムを提供しています。「科学と社会をつなぐ架け橋」を掲げ、異分野の大学院生が理科教育、博物館の在り方から昨今話題のクリスピーキャス9、水素水、人工知能、シンゴジラまでを熱く語り合う場です。私の仕事は彼らの議論に燃料投下をしたり、自分が開催するワークショップに巻き込んだりなど、事務・教務仕事が増えた以外は白眉時代とやっていることはたいして変わっていません。

大学院生の彼らは「科学コミュニケーションとは何か」「異分野コミュニケーションを促進するにはどうすればよいのか」を真剣に考えています。その答えは一つではありません。しかし白眉での経験からするには必要なのは自由に思考する時間を研究者に与え、みんなで美味しいものを囲んで夜更けまで語り合うというシンプルな、でも今の大学環境では意外と簡単ではない条件が必要なのではないかなと考えます。

また、離れてしまっても、あるいは時間がたってもそのつながりは続くでしょうか。それを担保するには共有する価値



や拠り所が必要になってきます。白眉では、イベントや刊行物とともに作り上げることで共有してきた価値があります。だから今でも他愛のない話題でメールをしあう人がいたり、専門家として仕事を依頼したりされたりさせていただいています。「同期」の堀先生には農業指導を仰いだりもしています。そして何より生循環研究会。異分野の研究者が集まって「生循環」という概念を材料に熱い議論を行う場があります。誰の専門でもなく、誰もが専門家になる概念を作り上げるプロセス。それもまた1つの異分野コミュニケーションの形なのかもしれません。(えま ありさ)

江間 有沙

第3期特定助教、在職2012年4月1日～2015年3月31日 2015年4月1日より東京大学大学院総合文化研究科・教養学部附属教養教育高度化機構科学技術インタープリター養成部門 特任講師

ポスト白眉の日常

江波 進一

第2期特定准教授、在職2011年4月1日～2016年3月31日 2016年4月1日より国立環境研究所 環境計測研究センター 主任研究員

昨年の春からつくばにある国立環境研究所でお世話になっております。国立環境研究所は1974年に発足した国立公害研究所を前身とし、幅広い環境研究に学際的かつ総合的に取り組む我が国唯一の研究所です。多種多様な分野の魅力的な研究者に囲まれ、いい刺激を受けています。幸いなことに実験室のスペースも以前より広くなり、素晴らしい環境で研究させていただいております。またつくばの夜の闇は深いため(褒め言葉です)、読書にも精を出しております。

こちらに来て変わったことといえば、教育に携わる機会が増えたことかもしれません。ご縁があって東京農工大学で環

境科学の非常勤講師をさせていただいており、また京都大学地球環境学舎から修士の学生さんをインターンシップで迎え入れ一緒に研究を行いました。大学にいたときよりも教育の機会があるというのも珍しいですが、日々学ぶことが多く、充実しています。上記の関係で現在、地球環境学舎の特任准教授を兼任させていただいており、また今年の春からは京都大学化学研究所の客員准教授としてもお世話になる予定です。京大との良縁が続いていることをとても嬉しく思います。これも白眉の最終年に都七福神を巡ったご利益かもしれません!?

若さは酒のない酔いなのだ、とゲーテは言っています。我々は誰しも酔っているべきだ、とも。白眉時代は5年間、本当に気分よく酔わせていただきました。これは歴代センター長、プログラムマネージャー、水野さん、古家野さん、スタッフの皆様、そして多くのファンキーな同僚達のおかげです。白眉の良さの一つはその「カタギではない」ところにあると思います(褒め言葉です、念のため)。オモロクなくちゃ、京大じゃない。現役白眉の皆様もどうかいい感じに酔っぱらってください。幸い二日酔いにはなっていないので、僕もまた新たな酔いを探していきたいと思います。(えなみ しんいち)



今年のモットー

「阿呆、燃えているのなら消せ、燃えてしまったのなら、また建てる(ゲーテ)」

佐藤 弥

第1期特定准教授、在職 2010年4月1日～2014年9月30日 2014年10月1日より京都大学大学院医学研究科発達障害支援医学講座 特定准教授

私は白眉の後、医学研究科の寄附講座である発達障害支援医学講座に移りました。講義や事務はありますが、研究がメインの仕事です。白眉時代とそれほど変わらず、楽しい日々を送っています。

研究活動として、白眉の間に集めたデータを論文化したり、白眉のときに得た着想で実験したりしています。思えば白眉時代は、自由な時間を生かして論文や本を読みふけり、多様な研究者と議論して発想を広げ、すばらしい実験環境をいただいて山ほどデータを取らせていただきました。視野を広げて混ぜ合わせたぶん題材は新しいことばかりで、扱うのが大変ですが面白いです。例えば、私の研究内容は感情コミュニケーションの心理学・神経科学研究といったものだったのですが、伏木元センター長の研究に共通点を見出してコラボレーションをお願いし、食物を刺激として実験しました。食物が我々の感情を無意識のうちに刺激していることが分かり、驚きました。また白眉セミナーで聞く哲学や宗教の話は人生に深い示唆があると感じ、自分もそうした研究ができればと、幸福の神経基盤を調べて発表しました。科学的なアプローチで初期仏典と共通する主張にたどり着き、愉快に感じました。白眉の物理学者たちの高度な数学を用いたアプローチにも憧れ、自分も解析を洗練させようと取り組み、執筆中の顔処理の神経科学の原稿では人生で初めて微分方程式を書きました。



家族と天橋立にて。

研究の他、最近は武術の修行に励んでいます。運動不足でなまった身体をメンテナンスくらいの軽い気持ちで始めたのですが、年上や同年代でがんばる仲間達と出会って刺激を受け、骨を折ったり折られたりしながら予想外にハードな修行に取り組んでいます。元気になりました。

また定期的に、家族とお出かけしています。大成果を出しながら家族を大事にする白眉の同輩を見習いました。子供の世話は普段ほとんどできていないのですが、お出かけのときくらいはと、企画したり運転したり真剣に遊んだりしております。ポジティブ感情のエネルギーを充填できます。

こうしてコツコツ研究する日々の中、ポスト白眉研究者として少しでも意義ある成果を発表できればと思います。

(さとう わたる)

Y UMEKUSA

エッセイ

サーフィンと研究の意外な共通点

安藤 裕一郎

これまでに複数のスポーツをやってきた。テニス歴は20年以上になる。しかし、あまり好きではない。無料のテニスコートはあるが、ここ数年は使っていない。運動不足を解消しようと数年前に始めたのがサーフィンである。5年間在籍した九州大学伊都キャンパスの近所には幾つものサーフポイントがある。夏のイメージが強いスポーツだが、日本海側のハイシーズンは意外にも冬である。ダウンジャケットを着ても凍えるような真冬に海に入り、着替えの時には寒空の下でタオル一枚になる。正気の沙汰とは思えない。

波が小さすぎて1回も乗れない日もある。身長以上の波に飲み込まれて溺れる日もある。丁度良い波なんて10日に1日程度だろうか。辛いことの方が多はずなのになぜかハマっている。下手の横好きだが、遠出してでも海に行きたくなる。何故なのか？

波乗りに失敗した時、自然が相手だと素直に諦められるからかもしれない。人間の力では波を思い通りにすることはできない。ただ、それを歯痒く思ったことは一度もない。自然の偉大さを感じ、畏敬の念を抱くだけだ。そして10回に1回程度、自然は素敵なプレゼントをくれる。この回数も絶妙なのだろう。私はこういう状況がたまたま好きなのだ。

意外だが研究にも共通点がある。現在は工学研究に携わっているが、最先端技術を駆使しても自然を制御することはできない。ただ、自発的に起こりうる現象を利用させてもらうだけだ。無理なものは労力と財力をかけても出来ない。出来るものは簡単な手段でも出来る。すべては自然が決めている。そして研究の大半は失敗する。ごく一部の研究が成功し、この上ない興奮を与えてくれる。自分にはどうすることもできない偉大な存在からのバランスのとれた鉛と鞭が、私を惹きつけて止まないのだろう。自然の偉大さを肌で感じる事ができるサーフィンと研究に心から感謝している。

(あんど う ゆういちろう)



真冬のサーフスポット（福岡県の糸島半島にある野北ポイント）。